

① flap 形成が明らかな型 = Flap 型と, ② flap があきらかでない壁内血腫型 = IMH (Intramural hematoma) 型とに分類できる. 当院で経験した 7 症例における, CT 所見 (解離型と解離腔の特徴, その他の随伴所見) とその後の経過について検討した.

【結果】解離型は, IMH 型 3 例, Flap 型 4 例であった. IMH 型は 3 例とも保存的治療が可能であった. Flap 型で無症状の 2 例は保存的治療が可能であった. Flap 型で有症状の症例は, 1 例は上腸間膜動脈閉鎖と腸管虚血により, もう 1 例は出血により, ともに外科的治療が必要となった.

【結論】上腸間膜動脈解離の CT 所見により, その予後・治療方針が異なってくるようであり, CT 所見はその治療方針の決定に有用な情報を与えると考えられた.

II. 特 別 講 演

1 末梢性肺癌の CT 診断

—これは肺癌, これも肺癌, これは違う—
国立がんセンター
中央病院放射線診断部医長
楠 本 昌 彦

2 中枢神経疾患における造影 MRI の意義

杏林大学放射線科助教授
土 屋 一 洋

第 56 回新潟画像医学研究会

日 時 平成 19 年 6 月 30 日 (土)
午後 2 時～
会 場 万代シルバーホテル 5 階
「万代の間」

I. 一 般 演 題

1 閉口末期における閉口障害の 1 症例 — MRI 画像所見からの原因の考察 —

西山 秀昌・林 孝文・新国 農*
田中 礼*
新潟大学大学院医歯学総合研究科
顎顔面放射線学分野
新潟大学医歯学総合病院・画像診断診療室*

最大開口後に下顎頭が円板の前方肥厚部を越えることによって閉口障害を来す場合, open lock と呼ばれているが, 閉口末期において発生する閉口障害の画像所見として認めることは少ない. 今回, 我々は, 閉口末期に閉口障害を来し, 下顎の左右への運動後に閉口可能な症例にて, 興味ある画像所見を得たので報告する.

症例は, 右側顎関節の疼痛を主訴に来院した 26 歳の女性で, 1 週程前から, 閉口時に右側顎関節に時々疼痛と引っ掛かり感を覚えたという. 初診時の開口量は 50mm であった. また, 閉口時と咬合時に右側顎関節部に疼痛が認められた.

MRI 検査にて, 右側の過剰運動が認められ, また, 閉口障害を来す顎位にて円板後方肥厚部と関節窩との間に後部結合織が挟み込まれている所見が認められた.

右側顎関節の過剰運動によって後部結合織が伸展され, 閉口時に弛んだ状態の後部結合織が円板の後方肥厚部と関節窩の間に挟み込まれたものと推察された.